

グループ・ダイナミックスの生かし方

——幼稚園の先生のために——



関 計 夫

一、親しさと厳しさ

グループ・ダイナミックスと言えば、グループの成員が仲よくまじわり、たがいに相手に対して寛大な気持でつきあってゆく事を説く理論だと考える人が多い。

たしかに、これはグループが一つの小さい社会として成立してゆく上には、欠くことのできない条件である。グループの人々がケンカばかりしたり、たがいに嫉妬心をいだくような場合には、グループはまとまった活動ができない。また、グループの中にいけすかない人物がいて、その人がいるために他の者がひっ込み思案になったり、劣等感をいだく場合には、その集団の魅力はきわめて少なくなる。グループ・ダイナミックスはどんな人ものびのびと生きてゆくことができるために、グループ内の人々に対して、おたがいに許容の雰囲気になるように、リーダーが指導することをすすめている。

とくに幼児は自己中心で、相手の立場に立つてものごとを判断することができないから、他人の欠点や失敗に対して、遠慮会釈なく非難し、ケンカに移行することが多いから、たがいに相手に対して寛大な気持になるように指導することは、どんなに強調しても、強調しすぎることはない。

だがしかし、集団はなごやかであるだけでは充分ではない。幼稚園も一つの教育機関として、子どものしつけを行なわねばならない。それには或る程度まで、きびしさが必要になってくる。他の子どもも邪魔をする子ども、先生の言いつけをいっこうにきこうとしない子ども、ブランコを一人で占領して、いつまでも友だちに渡さうとしない子ども、そういう子どもに対して薬とした態度で臨むことも必要になってくる。

集団が親しさと共に厳しさを必要とすることは、産業におけるグループの研究から、さいきん明らかにされた事柄である。親しさは

必要であるが、親しさだけでは妥協にすぎず、産業の生産性が上らないのである。親しさを集団の維持機能 (maintenance function) と言うなら、きびしさは生産の機能 (productive function) であり、集団にはこの二方面が同時に必要と考えられるのである。

この二つの機能、Mの機能とPの機能は、家庭における母 (emma) の機能と、父 (papa) の機能に相当する。指導者としての父と母はこの二つの機能をはたさねばならない。そのように職場における第一線監督者と第二線監督者はこの二つの機能をはたさなければならぬ。わたしたちの研究によると、直接に生産に従事する者と監督する第一線監督者は生産の機能を多くはたし、第一線監督者を指揮する第二線監督者は維持機能を多くはたすほうが、生産はあがるようである。

幼稚園でいうと、第一線監督者は子どもに直接に接触する保育者であり、第二線監督者は園長にあたる。そこでグループ・ダイナミックスの理論をここに応用して言うならば、保母は比較的きびしく、園長は比較的やさしく子どもを取り扱うのがよいということになるがどんなものだろうか。

二、お 約 束

ちかごろのグループ・ダイナミックスの花形は態度変容の研究である。これは説得の研究ともいわれる。教育とは相手にならんらかの

態度変容をおこさせることであるから、グループ・ダイナミックスにおけるこの方面の研究は、きわめて重要な意義をもっている。

ところで、従来説得には教師が相手にむかって一方的に訓示を垂れて、相手がそれにすなおに従うことを期待したが、グループ・ダイナミックスは相手の人たちに話し合いをさせて、こうしようというように集団決定をさせたほうが、効果があることを発見した。たとえば、オレンジ・ジュースと肝油が乳児の発育に効果があることを、栄養士が母親に講義した場合よりも、栄養士がリーダーとなって母親会議をひらき、話し合いの結論として、子どもにオレンジ・ジュースと肝油を飲ませることをきめさせたほうが、二倍以上の効果があることがわかっている。

小学校以上になれば、書取練習を宿題でやってくることや、教室で部屋を出る際に椅子を机にきちんとよせるしつけについて、教師の一方的訓話よりも、子どもの集団討議と集団決定にうったえのほうが効果があることが、わが国の実験によって知られている。

さらに、集団決定したあとで、自分はどうすると、一人ひとりが自己の決意をみんなの前に披瀝したほうが、集団決定だけの場合よりも効果があるようである。

この点は幼稚園でも応用することができる。幼稚園では集団討議や集団決定をすることはむずかしい。がしかし、先生に対し、またみんなの前で、ぼくはこうします、とお約束をすることはできる。

先生が説話を行なっただけでなく、一人ひとりの子どもに、自分は
どうやって実行するかを考えさせて、お約束をさせれば、その効果
はあるに違いない。

これまでの研究では、夜尿症の治療について、このことが確かめ
られている。毎日夜尿があったか否かについて○・×の成績表をこ
しらせ、夜やすむ前に、「きょうはお洩ししませんねえ」とお母さま
とお約束をすると、夜尿しない効果が大きくなるのである。

偏食を矯正する場合にも、訓話だけでなく、お約束をすれば、そ
の効果はあるに違いないと思うが、寡聞にしてまだそうした比較研
究をきかない。

お約束をすると、どうして効果が多いのかという理由は、いくつ
か挙げられている。一つは、自我関与 (ego involvement) というこ
とばで呼ばれていることである。自分がするんだという自発性や自
主性が加わるからである。もう一つは、先生や友だちの前でのお約
束であるから、社会的圧力 (social pressure) がかかるという事
である。俗なことばでいえば、先生や友だちに対して、義理ができる
からである。さいごに、友だちもお約束をするような場合には、自
分はみんなの一員であるという仲間意識があり、それがみんなと同
じようにしたい、という努力をうむのである。

幼稚園では、あとかたづけのしつけに苦勞する。家庭でも、遊ん
だあとを片づけさせることはなかなかむずかしいものである。これ

にお約束をさせることによって、その効果をためてみてはどうで
あろうか。

三、同 調 性

テレビを見せるとき、三才児、四才児、五才児をどう配列したら
よいか、が問題になる。三才児は小さいから最前列にならば、そ
のうしろに四才児を、最後列に五才児をおいてみた。

すると、三才児は前でさわぐので、うしろの者が視聽するのに邪
魔になる。幼児番組はたいがい四、五才児を対象としているから、
三才児がさわぐのは無理もない。そうかといって、四、五才児だけ
にテレビを見せて、三才児を運動場であそばせようとすると、一才
も人並みで、三才児もテレビを見ることを切望する。それで見せな
いわけにもゆかない。そこでこんどは、三才児を最後列にし、四、
五才児を前にしてみた。すると、三才児はうしろがいているの
で、いつそうさわぐようになった。

けっきょく、三才児は四才児と五才児の間にはさんで見せるのが
いちばんよいことがわかった。サンドウィッチのように、両側から
はさむと、いちばん静かに視聽するのである。まんなかに位置して
いるとき、集団の一員としての行動がとりやすくなるのである。

お話し会を開くとき、子どもを舞台上にむかって静かに視聽させる
ことは、主催者が苦勞するものである。そんな時、何人かのおとな

が手を叩くと、それにつられて子ども全体が拍手する。そうすると、しぜんと後が静かになる。時には、舞台にあらわれた司会者が「それでは手を叩いてお迎えしましょう」と言つて、拍手をさせることもある。NHKの現場中継放送のときは、合図によつて会衆が拍手をする。あの伝である。童話の先生などは、舞台にあらわれながら、みずから手を叩いて拍手をきさうこともある。思いきり手を叩けばあとは静かになるから話がらくになる。

政談演説会などで、サクラが聴衆に何人かまじつて拍手をきさう場合がある。演壇にむかつて、十字形の位置に散在してサクラが拍手すれば、ほかの人は聴衆がみんな拍手するような気になつて、思わず知らず、拍手する。十字形の拍手の構造のなかに、一般聴衆を巻きこむのである。

テレビ視聴の場合は、三才児を四才児と五才児の間に挿入することによつて静肅にすることができたし、お話し会の上きは、拍手の構造のなかにひき入れることによつて、拍手に同調させることに成功した。いずれも、子どもにメンバースhipの役割を演じさせることによつて、みんなと同一歩調をとらせることをねらつたものである。

それのみではない。「しいのみ学園」という本をみると、小児マヒの子どもらが藁縄を電車にして、電車ごっこをする場面がある。チンチン、ゴーと一まわりした電車が、一人じつと立つてそれを見守つていた五才の女の子の前でとまる。運転手が女の子にむかつて、

「いっしょに乗らないか」とすすめる。お母さんが「この子は歩けないですよ」と答える。「大丈夫だよ。ぼくがゆつくり運転するから。」こう言つて、女の子をむりに縄の中に入れてしまふ。女の子の前にも後にも、ほかの子どもが乗っている。電車はしずかに動き出した。すると、いまままでに一度も歩いたことのない女の子が歩き出した。「あッ、歩いてゐる。」お母さんは全く驚いてしまった。その中、電車は「急行！」という運転手のかけ声と共に、走り出した。女の子は友だちの間にはさまつて、出るにも出られない。思わず知らず走つてゐる。自分でも知らないふしぎな力で、自分がかり立てられてゐるのである。歩けないもの、走れないもの、とばかり思つてゐたのに、集団の規制によつて、みんなと同じ行動をとつてしまつたのである。集団治療のみごとな業績がそこにある。これは「しいのみ学園」をひらいた山本三郎氏も、ぜんぜん予想しなかつた出来事である。こうすれば、歩けない子どもも歩けるだろうと予想して電車ごっこをさせたのでなく、まったく自然発生的に子どもが仲間からはずれた一人の子どもを仲間に入れることによつて、子どもが集団治療を実践したのである。子どもがむしろ山本氏に集団治療の方法をおしえたのである。

子どもを謙虚に眺めるならば、グループ・ダイナミックスの理論に貢献するような事実はいくらでも転がっているように思う。

(九州大学)